

実践におけるアイデアの収束と選択 ～いくつかの試みと考察～

久永 滋(株式会社デンソー)

概要

当社では 2003 年より TRIZ の導入を始め、現在まで社内での TRIZ 活用を推進してきている。そこでは、社内の希望者が社内推進者とともに実際の業務に TRIZ を適用して開発を推し進める、実践を中心に行っている。企業である以上当然その実践に対しては成果が求められる。

TRIZ 活用の成果とは何か？ 多くの場合「良いアイデアが得られれば」成功とされ、また「数多くのアイデアが得られた」場合でも成功とされる。しかし、TRIZ を活用する本来の目的は、問題を解決したり、製品開発を次のステージへ推し進めることである。その本来の目的から見ると、「アイデアが得られた」だけでは道半ばに思える。

そうした問題意識から、アイデア出しの後の工程として「アイデアの収束と選択」についていろいろな方法を試み、より明確な成果を出そうと求めてきたつもりである。しかし、活かされることなくボツとなるアイデアの数を思うとき、またアイデアがあってもなお明確な開発方向が見出だせないとき、「アイデアの収束と選択」についてはまだまだ正しい方法が得られていないと思わざるを得ない。

十数年間の TRIZ 実践活動の中で行ってきた、「いかにアイデアを収束するか」、「どのアイデアを選択すべきか」に対するいくつかの試みを整理し、どうあるべきかの考察を加える。

内容説明

1. 会社概要
2. 今回の論点
3. 標準的なアイデア収束と選択
4. アイデア収束と選択のいくつかの試み
5. アイデア収束と選択の事例
6. アイデアの収束と選択のあり方の考察

